
対象の広がりや生活の場を体験する「島嶼・国際保健看護実習」

佐久川政吉（島嶼保健看護）科目責任者

科目の新設の経緯と実際

島嶼県沖縄の地で、本学の使命でもある島嶼保健看護の教育の推進するために、新設された1年次後期の「島嶼・国際保健看護実習島嶼実習」（1単位）は重要である。5日間の実習であるが、本稿では、1日～3日目の島嶼実習に特化し、国際実習（4日目）と全体報告会（5日目）については別稿に譲る。

科目概要は、「実習をとおして島嶼に住む人々や国内に滞在する外国人との交流から、看護の対象の広がりや看護の対象が生活する場の広がりを理解する。これらの人々との交流を通して多様な生活様式、文化、価値観にふれることで、看護の対象を理解する視野を広げる意義を学修する」である。目標として、島嶼実習では、1) 島嶼の環境の特徴を知り、そこで暮らす住民の暮らしや健康課題を述べることができる。2) 島嶼への訪問を通して、専門職や住民などと交流し、生活様式、地域文化、価値観を理解する、ことである。

実習1日目は学内でグループ（6名）ごとに、実習先（島）の概要（人口や資源等）やスケジュール、訪問先とインタビュー内容等の確認・調整、情報収集を行う。2日～3日目に小離島を訪問する。その小離島は、久高島、座間味島、阿嘉島、渡嘉敷島、離島架橋の伊計島、浜比嘉島である。架橋離島を含めているのは、実習期間中のリスク管理（感染症拡大、台風等）と、架橋離島には小離島とは異なる特性があるためである。実際、令和4年度において、台風接近に伴う船の欠航のため、座間味島・渡嘉敷島等に渡られなくなったが、急きょ変更し、架橋離島に40名の学生を配置することで履修することが出来た。

実習の工夫としては、看護の対象の広がりや生活の場を体験するため、役場、公民館、商店、漁協、小中学校、診療所等を見学し、道中、路地も歩きながら（距離によって車移動）フィールドワークをする。講話やインタビューの対象は、専門職ではなく、地域の高齢者等の住民、区長、民生委員、観光業・農業・漁業者等に行っている。実習前には、役場の保健師や行政職、診療所看護師等の専門職と調整を重ね、コーディネートを担ってもらっている。

令和5年度の学生評価（28名）として、①問い「私は主体的・積極的に実習に取り組んだ」に対し、「非常に当てはまる」23名（82%）、「かなり当てはまる」5名（18%）、②問い「教員の助言は実習到達の目標に活かせるものであった」については、「非常に当てはまる」25名（89%）、「かなり当てはまる」3名（11%）、③「総合的にみて私は実習に満足できた」については、「非常に当てはまる」24名（86%）、「かなり当てはまる」4名（14%）であった。自由記載では、「入学してずっと楽しみの実習だった。島の人たちと話せてとても楽しい実習だった。次は看護活動も出来るようになって、島の実習に行きたい」等があった。

新カリ完成（2025）年度に向けて

実習先まで車・船を利用するため、移動時のアクシデントのリスクが高まる。1年次でもあり、環境変化に不慣れな学生がいること（船酔い、路地での車の接触事故等）から、体調不良・ストレス等が想定される。教員はリスク管理を徹底し安全な実習を展開していく必要がある。
